（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	佐藤 真理恵
論文題目	仮象のオリュンポス ――古代ギリシアにおけるプロソポンの概念とイメージ変奏		

（論文内容の要旨）

副題にもあるように、「古代ギリシアにおけるプロソポンの概念とイメージ変奏」を主題とする本論文は、序と結びにはさまれて以下の四つの章からなる。すなわち順に、Ⅰ.「 プロソポンの基礎概念――語源および用例から」、Ⅱ.「プロソポン――〈あらわれ〉の方へ」、Ⅲ.「対面としてのプロソポン」、Ⅳ.「アプロソポス――別様の「顔」の形象のために」、である。

第Ⅰ章ではまず、この語が「～の方へ、～に対して」を意味する「プロス」と「目」を意味する「オープス」とからなる合成語であり、「顔、容貌」や「正面」、「仮面」や「（とりわけ演劇における）役柄」、さらには「人、法的人格、人称」といった多義的な意味を持つ語であることが確認される。その上でアリストテレスの『詩学』等のテクストに依拠して、プロソポンという概念が「相対するという関係性を導く」ものであり、「外側へと開かれている」性質を有することが明らかにされる。近代人は「仮面」を虚偽のものと捉える傾向にあるが、古代において「仮面」と「顔」は、ともに他者の目に映るものとして、はっきり区別されていたわけではない。そこにプロソポンの本質があることが、文献や壺絵の詳細な分析を通じて説得的に論じられていく。演劇の「仮面」に特化した意味としては「プロソペイオン」が使われていたこと、さらに、「偽善者」の語源とされる「ヒュポクリテス」も本来は「返答する者」や「役者」という意味であったとも指摘される。また、プロソポンのラテン語訳が「ペルソナ」で、この語にも本来の多義的意味が受け継がれていること、さらにキリスト教において三位一体の「位格」へと拡大解釈された点も確認される。

次に第Ⅱ章では、プロソポンの内に含意される「仮象」としての諸特徴――「表面」「襞」「痕跡」「面影」――が、どのような形で哲学（プラトン、クセノフォン、デモクリトス等）や文学（エウリピデス等）や美術（主に壺絵）の中に表現されているかが具体的に辿られる。そこから「プロソポンはたんなる表面ではなく、そこにそれ自体では不可視のものを透かし見せる／表出させるような場＝〈あらわれ〉」である、と結論される。内（深層）と外（表層）を区別して前者を後者よりも重要視する発想は、使徒パウロによる「うわべ（プロソポイ）」と「心（カルディアイ）」にまで下るのではないかという興味深い仮説も提示される。加えてプロソポンとも密接なつながりのある二つの重要な概念、「エイコン（肖像）」と「エイドラ（幻像、影像）」についても検討されている。とりわけデモクリトスに拠りつつ「事物の剥離物」とみなされる「エイドラ」が表面としてのプロソポンと通底するところがあるという指摘は、古代ギリシアの

視覚論をも視野に入れた独創的なものである。

続く第Ⅲ章では「対‐面」あるいは「正面性」としてのプロソポンが、古代ギリシアの演劇や祝祭や芸術においていかなる意味や機能を果たしていたのかが、古代のテクストや壺絵の具体的な分析とともに、ヴェルナンやフロンティシ=デュクリ等の近現代の先行研究をも踏まえながら考察される。ここで鍵概念となるのは、「他者性」、「境界性」、「アポストロフェー（頓呼法）」、「鏡面／スクリーン」である。申請者によればこれらは順に、祭事において「神の眼差しのもとで変容し他者と化すこと」、自己を超えるという意味での「脱‐自（エクスタシス）」の実践、「対面という状況に（人を）引き込むはたらき」、「自己を反射・投影する鏡としての他者」として解釈されうるものである。これらはまた、ディオニュソスやゴルゴン（メドゥーサ）の神話とその表象とも強く結びついていることも論じられる。

最後に第Ⅳ章では、プロソポンに否定の接頭辞がついた形容詞「アプロソポス」という概念が取り上げられ、プロソポンが逆照射される。この語は古代ギリシアで稀にしか使われなかったが、申請者はそれらに新たに着目することで、「顔の無い、顔の美しさを欠いた」「仮面を着けていない、あけすけな」という意味のこの語が、美‐醜のカテゴリー、倫理性、非人称性などと密接に関連していることを論じる。その上で申請者は、「アプロソポス」はプロソポンの多義性と複数性をそっくりと引き受けて反転させているという新たな仮説を提示する。このように本論文は、古代ギリシアの特異な概念である「プロソポン」の本質に、古典文献学と美術史、さらには神話学や人類学の成果をも駆使しながら具体的で詳細かつダイナミックに迫ろうとするものである。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、古代ギリシアの哲学、演劇、美術においてきわめて重要な役割を果たしている「プロソポン」という概念にして表象を真正面から取り上げ、その本質に迫ろうとするものである。このテーマは古代ギリシアの思想と芸術の核心をなすもののひとつとして、欧米では厚くかつ深い研究の蓄積があるが、本邦ではいまだまとまった研究は著わされておらず、その意味でも本論文の意義は大きい。その方法と内容に関して、本論文が高く評価できる点を、四つの点に分けて以下に述べる。

１．哲学と演劇のテクストに関して、古代ギリシア語の原典に丹念にあたり、それらの文献学的な分析を踏まえたうえで全体の論を組み立てている点。具体的には、ホメロスはもとより、プラトンの『パイドン――魂の不死について』や『ティマイオス』、アリストテレスの『問題集』や『詩学』といったオーソドックスなものから、デモクリトス、エウリピデス、クセノフォン、テオプラストス、さらにはポッルクスやルキアノス等といった紀元後の著作家に至るまで、時代もジャンルも異なる幅広い文献を視野に入れて、「プロソポン」とそれに関連する用語――「プロソペイオン」「エイドロン」「ヒュポクリシス」等――の意味と用例を整理している点である。さらに、否定の接頭辞を付けた形容詞「アプロソポス」の少ない用例を原典から炙りだし、そこから「プロソポン」を逆照射している第Ⅳ章は、柔軟な発想による本論文の独創的な成果として読むことができる。

２．古典文献学のみならず、美術史の図像学的な方法をも取り入れて、両者を合体させている点。「プロソポン」が「顔」と「仮面」の両方を意味するとすれば、両者は例えば壺絵等においてどのように表現されているのかという点もまた、重要な問題となる。この問題に関して、本論文は、具体的な美術作品の分析を通じて明らかにすることで、文献学的方法によって得られた知見をさらに補完し、確証している。このように視覚的なイメージと比較する方法は、おおむね本論文の全体について当てはまるが、とりわけ「正面性」や「顔面性」を分析している第Ⅱ章「プロソポン――〈あらわれ〉の方へ」において際立っている。さらには、当時の視覚論や光学論にも効果的に言及しているが、これは本論文のテーマの性格上、必要不可欠のものである。

３．ジャン=ピエール・ヴェルナンやフロンティシ=デュクリュといった、人類学や精神分析学をも考慮に入れた現代の古典学者たちの新しい領域横断的な研究にも周到に目配りしている点。とりわけ、ディオニュソスやゴルゴンの神話と「プロソポン」との密接な関係性や、古代ギリシアにおける「他者性」や「死」、「視覚性」や「仮象性」を論じるうえで、上記の研究者たちへの参照は不可欠である。これら方法上の三点は、「プロソポン」をめぐる問題系が多岐にわたるために、当然踏まえるべき手続きであると言ってしまえばそれまでだが、実際に論文において結実させることは容易なことではない。本論文は、いまだ深めるべき部分を残しているとはいえ、それに果敢に挑戦している点で高く評価できる。

４．上記のような領域横断的な分析によって、新たな仮説を提示した点。たとえ

ば、第Ⅱ章「プロソポン――〈あらわれ〉の方へ」では、内（深層）と外（表層）を区別して前者を後者よりも重要視する発想は、もともと古代ギリシアにはないもので、使徒パウロによる「うわべ（プロソポイ）」と「心（カルディアイ）」にまで下るのではないかという興味深い仮説が、そのひとつである。また、第Ⅳ章「アプロソポス――別様の「顔」の表象ために」においては、これまで欧米の研究においてもほとんど取り上げられることのなかった、「アプロソポス」、つまり「プロソポン」に否定の接頭辞「ア」のついた用語法が検討され、「顔の無い、顔の美しさを欠いた」「仮面を着けていない、あけすけな」という意味のこの語が、美 - 醜のカテゴリー、倫理性、非人称性などと密接に関連していたことが浮き彫りにされていく。その上で申請者は、「アプロソポス」はプロソポンの多義性と複数性をそっくりと引き受けて反転させているという新たな仮説を提示する。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成２７年６月２６日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降